まる福連携2025

異業種との対話から福祉を探る

一般社団法人福祉システム北海道
代表理事 髙橋 銀司氏
（社会福祉士、介護福祉士）

エピソード5　オンライン日本語教師　登り口　倫子 さん

教えるにも「対話」が大切

のぼりぐち・みちこ　2020年から言語学習サイトitalkiや日本語学校のオンライン講師として外国人に日本語を教える。その傍ら、障害当事者、社会福祉士として福祉の専門学校や重度訪問介護従事者研修で、利用する立場からの視点での授業を展開している。

■日本語教師のお仕事をされてどのくらいたちますか。どのようなお仕事ですか。

５年ほどたちます。日本語教師の仕事は、日本語を母語としない外国人を主な対象として日本語を教える仕事です。日本のアニメが好きな方や日本に住みたいと思っている方、仕事をしたいと思っている方などさまざまなニーズに合わせて日本語を教えています。

■日本語教師になろうとしたきっかけは何ですか。

オンラインの仕事をしたいと思っていて、コロナ禍だったので、自分の仕事のことを考えた時に、現実的にオンラインでできる仕事がよいと思いました。たまたま友人から「日本語教師の仕事があるよ」と教えてもらったことや、日本語教師の養成学校が家の近くにあったこともあり、申し込んでみようと思って始めたのがきっかけです。

■仕事で大切にしていることは何ですか。

日本語を学びたいと思っている外国の方たちには、それぞれのニーズがあるので「どんな日本語を勉強したいのか」というのを必ず聞いてから、その方に合わせてレッスンを計画することを意識しています。アニメを見たい方、日本人の友人と話せるようになりたい方、医師で日本人の患者と少しでも話せるようになっておきたい方など、とにかく日本の文化や日本人と関わりたいという人が多いので、それぞれのケースに合わせコミュニケーションをとれるようになるようなレッスンの仕方を考えます。

■キャリアの中で苦労した経験や、乗り越えた秘訣（ひけつ）を教えてください。

基本中の基本ですが、私も日本人として日本語を話せるのが当たり前という状況で、「〇〇してください」という意味も分からないという方が勉強されているのですが、その時に子ども扱いのような態度など、そういう風にしてしまいそうになることが経験の浅いときにありました。そうではなくて、外国の方はその母国語で生きてきて、私たちと同じように経験を積んできた大人の方が多いので、言葉が全然分からない方に対しても尊重しながらレッスンをしていくっていうことをやらなければいけないと思ったのです。

振り返って私が失敗したと思うことは、例えば、外国の方が私の質問にうまく答えられたときに、「まぁ！　とてもすごいですね！」などの言葉をあまり多用し過ぎると、かえって「自分はまだまだ話せていない」と思っている大人の方は「ちょっと子ども扱いされているな」というように違和感を持たれたりします。その場合は、レッスンの予約がされなくなることもあります。信頼関係がないとレッスンは長続きしません。人として尊重するというところを基本的なことですが、意識しています。

■日本語教師をしていて福祉や介護を感じる時ってありますか。

日本語の場合、私はネイティブで、受講者の方々は日本人の子どもより話せないかもしれないとなると、目に見えるかたちで言語のレベルに差があります。そこに上下関係が生じてしまわないよう意識しないと「先生が上」「受講者さんが下」というかたちになりがちです。それと同じように、福祉分野でも利用者さんと支援者の方との間に上下関係ができないようにすることが理想です。当然のことだと思いますが、私が日本語教師として関係の在り方について注意していくことが、お互いの信頼関係を築いていくために大事なことだと思っているので、そのような点が福祉と共通しているかなと思っています。

■登り口さんは社会福祉士でもありますが、日本語教師として福祉業界はどう見えていますか。

言語とか言葉という意味では、支援される方が利用者さんとの信頼関係を築くのに「言葉」に意識を向けているか、自分が使っている言葉を自分でよく理解して利用者さんに使っているか、を意識した方が良いと、日本語教師になってより一層思うようになりました。「言葉」について考えなくてはいけない世界なのかなと改めて思っています。

■仕事の中で福祉と共通する点はありますか。

自分が相手にどんな言葉を使っているのかというところを意識して、そして「あ、これは自分が相手を大切にしていない言葉かもしれない」と思ったら、その言葉を変えていくことや、自分で身に着けていくっていうところですね。そこがとても大切になってくると思います。

■日本語教師の立場から福祉業界の人たちに知ってほしいことってありますか。

福祉業界では今外国人の方たちがどんどん働かれるようになっており、一緒に働く機会もでてくると思います。その時に、日本の中に違う文化の人が入ってくると、日本人として「あれ？」と違和感を抱くことがあるかもしれません。けれども、その感じた違和感も大切にしながら「どうしてそういう風に感じたのだろう」ということを自分なりに振り返って、目の前にいる同僚の外国人の方の文化を理解していこうという気持ちも大事だと思うんですね。せっかく一緒に働く機会があるのですから、そこも一緒に理解していただきたいなと思っています。

■外国の方と関わる機会が多いと思いますが、エピソードなどありますか。

例えば、いつもレッスンをしていると大体はフリートークをすることが多くて、「休みの日をどう過ごすか」というところをとても大切にされている方が多いかなと感じます。レッスンでは最初に「休日、週末に何をしましたか」と聞くことが多いんですね。そうすると「家族と一緒にバーベキューをした」「ライブに行ってきた」と必ず直ぐに話してくれます。休日に関する質問を毎週聞いても必ず何かしら楽しいことをしたりしているので、その点はもしかしたら日本人と違うところかもしれません。人によるので何とも言えませんが…。（笑）

■障害当事者でもありますが、こんな介護サービスは受けたい、受けたくないといったものはありますか。

私自身は、自宅にヘルパーさんがいらっしゃるという生活をしていますので、自分のプライベートの空間にいろいろなヘルパーさんがいるという状況ですね。その時に、私のプライベート空間なので、こちらからお話ししていない部分や、聞かれたくないこと、プライベートの部分に介助で入ることで知る私の情報がたくさんあります。それを他の人に安易に伝える方の場合は安心して生活ができないので、そういった方がヘルパーとして来ていただくことには抵抗を感じます。

◇あとがき◇

海外の方が驚くほど日本語を上手に話していると、「どうやって勉強したのですか」と伺いたくなります。実際、伺うと「日本のアニメを見て覚えました」と答える人が少なくありません。好きな作品を楽しみながら言葉も身につく、まさに一石二鳥の学び方です。ただし、アニメ学習だけでは限界があります。学んだ日本語を会話の中で確認できないため、イントネーションの違いで意味が変わったり、思わぬ誤解を招いたりする心配があるそうです。そこで登り口さんが大切にしているのは、受講者との「対話」です。毎回のレッスンの冒頭には「休日、何をしましたか」と問いかけ、そこから自然な会話を広げます。一方的に教えるのではなく、コミュニケーションを通じて日本語を育てていく。そこに上達の大きなヒントがあるように思えます。

今も日本語の難しさに向き合いながら介護現場で働く海外の方々がいます。私たちが日本語で自然な会話を広げられる環境をつくってあげられたなら、その人の言葉はもっと豊かに、そして介護現場での力にもつながっていくのではないでしょうか。

◎インタビュアー◎

たかはし・ぎんじ　小清水町出身。Ezo'n music福祉ジャーナリスト。日本医療大学総合福祉学部助教。札幌市市民活動サポートセンター市民活動相談員。

〇（まる）福連携プラス YouTube配信中

インタビューの様子を動画で配信中。紙面に掲載しきれない内容を10分ほどの動画にまとめています。